



「佐々木さんを支援する会」会報

# ウブムエ

事務局 〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 / TEL 045-774-9861  
洋光台キリスト教会内（蛭川明男牧師）／●世話人会代表 金子 敬  
●事務局長 播磨 聡（広島キリスト教会 TEL 082-293-8683）

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

## ジェノサイド 20 周年に誓う

佐々木 和之

ささき かずゆき

「20年間で初めて、今日、私の人生に何が起こったのか、話を聴いてもらうことができました」。

ピアスで平和構築を専攻するベレニスは、先週、「癒しのワークショップ」の後にこう語りました。

ジェノサイドにより両親を殺されて孤児となったのは、彼女がまだ10歳の時でした。その後、親戚に引き取られ、彼女はルワンダの南西の端、チャンググで高校卒業までを過ごしました。そして3年前、大学進学のために別の親戚を頼ってブタレに出てきたのです。親戚の家族の中で過ごし、学校にも行き、教会にも通ってきました。しかし、これまで誰一人として、彼女の身の上話を聴いてあげる人がいなかったのです。

ワークショップ2日目の夕べ、参加者各自で心の中に深い傷となっている事柄を紙に書き出す時間を持ちました。その後、二人一組になり、傷をもたらした体験について分かち合いました。ベレニスはその時初めて、民兵たちに連れ去られ、それ以来会うことができないでいる両親との離別の哀しみと、両親を埋葬できないでいることに対して感じている痛みを、傾聴のパートナーとなった女性に打ち明けたのです。



＜癒しのワークショップ＞

その後、参加者は、ジェノサイドや内戦によって奪われた家族を哀悼する時間を持ちました。参加者の多くは、家族と生き別れになった後、その人々がどこに埋められたのか、あるいは打ち捨てられたのかを知りません。その愛する者たちを想起しながら、彼らは心を込めて花を手向けたのです。

両親にお別れを言い、泣き崩れていたベレニス。妹を民兵たちに連れ去られた時のことを、嗚咽に遮られながらもやっとのことで語ったフランシス。私の学生たちにとって、ジェノサイドはまだ過去のことではありません。

この1カ月、ルワンダの人々と共に過ごしながら、私は、ルワンダと私とを結び付けた原点とも言える出会いについて思い起こさずにはおれませんでした。それは、今から12年前、ある地方政府事務所で、トラウマに苦しむ人々のカウンセラーとして働く職員の方から聞き取りを始めようとした時のことでした。私の質問を遮るように、その虐殺生存被害者である男性職員が言いました。「まず聞きたいことがある。1994年の4月から7月、あなたはどこにいたのか？」私は返答に窮し、しばし言葉を失った後、「アメリカにいました。大虐殺のことは、新聞報道で知っていたくらいでした」と答えました。それが的外れの答えであることを感じながら...

彼が私に突き付けたのは、「あなたは、私たちが一人残らず殺しつくされようとしていたあの時、いつ

たどこにいたのか？なぜ私たちを助けてくれなかったのか？」ということだったに違いないのです。その問いかけを受け、私にとってジェノサイドが、他人事ではなかったことを思い知ったのでした。

「あなたは、あの時どこにいたのか？」この問いかけが、今も叫びとなってルワンダの無数の丘々にこだましています。癒しのワークショップを共に体験し、私は再びこの叫びを学生たちから聴き取ることになったのです。

ワークショップ閉会の折、私にとっての原点であるあの出会いについて学生たちに語った後、「これからはあなたと共に、癒しと和解という希望に向かって歩んでいきたい」との決意を伝えました。20周年に原点に立ち返り、決意を新たにできたことを神様に感謝します。

## 佐々木 和之

ささき かずゆき

## 希望の証人たちと出会う

皆さま、いかがお過ごしでしょうか？いつもお祈りとご支援をありがとうございます。ご存知のようにルワンダはジェノサイドの20周年を迎え、各地で様々な行事が続いています。4月7日から今日までの一ヶ月間、私自身も大変忙しい毎日をお過ごしてきました。ピアスの教員と学生たちが計画・実施したジェノサイド記念式典、「平和構築と開発」専攻の学生たちへの「和解の理論と実践」なる講義、Mercy Ministries InternationalというNGOを招いての「癒しのワークショップ」、そして、農村に連日通り、草の根の人々の声を聴き取る作業を続けてきました。どれも内容の濃いイベントばかり。これだけ心と体のエネルギーを総動員した1カ月は、今まで無かったように思います。

### <生まれたばかりの子豚を持って>



### ■「二度と過ちを繰り返さないために」

まず、ルワンダ南東部、キレヘ郡で進められている、ジェノサイドの被害者と加害者が共に参加する養豚協同組合に関する続報をお伝えします。



### ＜丸々太った子豚＞

4月17日、妻の恵と一緒に、ブタレから片道約5時間運転し、二つの養豚協同組合を訪ねました。1月から2月にかけて生まれた子豚たちがずいぶん大きくなっていて驚きました。子豚たちの数も前回の訪問時よりかなり増え、二つの豚舎を合わせると58匹。もうすぐ販売を始める予定で、生後4カ月の子豚だと1匹1万フラン程度(約1500円)で売れるのだそうです。参加者のほとんどが自給自足的な農業を営む人々ですので、生まれてくる子豚は貴重な現金収入源です。

ガフゾ村の協同組合、「ドゥハラニレ・ウブムエ・ヌブギユンゲ」(一致と和解に励もう！37世帯参加)のリーダー、セルディオさんに「子豚を売って得た収入を何に使いたいですか？」と尋ねると、嬉しい答えが返ってきました。

「事業が安定して十分な収入が得られるようになったら、子どもたちがセカンダリー・スクール(日本の中学から高校まで)にいくための費用にしたい。組合員に無利子の教育ローンを支給することも考えている…」

ルガンド村の養豚協同組合、「アバハラニラ・アマホロ」(平和のために労する者たち26世帯が参加)のリーダー、エドゥアルドさんも、貧困からの脱出とともに、子どもたちの教育費用を重要目標にあげました。ルワンダでは、成績が優秀でも、寮費や制服代等が払えないために、中学校への進学を断念せざるを得ない子どもたちが多いのです。

以前、セルディオさんは、「自分たちは教育程度が低く、指導者の命令に盲目的に従ってしまった。ぜひ子どもたちにはより良い教育の機会を与え、二度と過ちを繰り返さない国にしたい」と語っていました。彼らが進める協同養豚事業には、「ネバー・アゲイン」という決意が込められているのです。

今後、二つの協同組合の運営がうまくいき、彼らが「和解と協働の果実」を得ていくことができるように、どうぞお祈りください。これからの課題は、リーチの支援に頼らずに各組合が自立経営を続ける能力を身に付けてもらうことですが、そのために強力な助っ人が現れました。日本国際飢餓対策機構からリーチに派遣されている河合朝子さんが、月に2回キレヘを訪ね、養豚組合の経営に関する講習を実施して下さることになったのです！河合さんは、農業協同組合経営を専門的に学ばれ海外経験も豊富な方ですので、学習意欲満々の組合員一同の期待に答えて下さることでしょう。

### ■共に生きる決意

二つの養豚協同組合を訪問した後、ベスティヌさんという虐殺生存被害者女性のご自宅を訪ねてお話を聴きました。今から2年以上前のことになりますが、彼女は地元のFMラジオ番組を通して、「償いの家造り」について知りました。そして、家造りに取り組むグループの代表であるセルディオさんに自ら連絡を取り、自分も虐殺被害者と加害者による相互扶助活動に参加させてほしいと言って、受け入れてもらったのでした。



### ＜共同貯蓄の話し合い＞



セルディオさんを始め、そのグループに参加する何人かは、彼女の兄弟の殺害に関わった、彼女にとって直接の加害者にあたる人々です。カトリック信徒の彼女は、教会で赦しについての話を聞いたときに反発を覚え、しばらく教会に行かなくなっていたこともあるそうです。しかし、「いつか彼らと話をしなければ」との思いが彼女の心を離れることはありませんでした。ラジオ番組で聴いた家造りに取り組む加害者の言葉、そして、それを受け入れ、今は一緒に家造りに参加しているという被害者の言葉が、彼女が大きな一歩を踏み出すきっかけになったのでした。

セルディオさんたちのグループが養豚プロジェクトに着手することが決定すると、彼女は、自分の土地をそのために使ってほしいと申し出ました。それ以来、彼女はガフゾ村にある養豚協同組合の中心メンバーです。

「虐殺被害者の追悼期間だし、落ち込んでないだろうか」と思いながら、彼女の家の前に車を停めて外に出ました。しばらく待っていると、「以前は何を着ようとまったく気にしなかった」と言うベスティーヌさんが、鮮やかなキテンゲ(アフリカ製の布)で仕立てた服に身を包み、私たちを笑顔で出迎えてくれました。そして、彼女の家の居間に入れていただき、通訳の青年の助けもかりながら話を聴きました。それは、薄暗い、家具は小さなイスくらいしかない小さな部屋でした。

私はまず、「先週の虐殺記念週はどのように過ごされましたか」と尋ねました。すると彼女は、「この時期はやはり辛い... 下の弟の遺体がまだ見つかっていなくて... 彼の遺体が見つかって埋葬できるなら、ずいぶん気持ちが楽になると思うのだけれど... でも以前はもつとずっと辛かった。家で寝込んでいることも多かった。今は、家族のことを思い出すだけではなくて、自分の生活をよくしていきたいと思う」とうつむきがちに答えました。

私は彼女にも養豚事業の事を聞いてみました。「養豚がうまくいって、収入を得られたどのように使いたいですか？」

「家を建て直したい。雨漏りがするたびに、昔のことを思い出してしまうから... 貧しさを脱して、生活を良くして、前を向いて生きていきたい。そして、彼らとこれからも一緒にこの村で生きていく...」ベスティーヌさんはこのように、彼女にとっての直接の加害者がいるこの村で、彼らと共に生きる決意を語りました。

もしガフゾ村を離れてどこか別の場所に住むという選択肢があるのなら、その方が彼女にとって良かったのかもしれない、との思いが私の頭をよぎることがあります。しかし、彼女は彼らと共に生きる道を歩んでいくと決めたのです。ベスティーヌさんは、その厳しい「癒しと和解」の歩みを今日も続けておられることでしょう。



＜ベスティーヌさん＞

ベスティーヌさんから日本の皆さんへのメッセージをお伝えします。

「皆さんこんにちは。皆さんがもう一度、私たちを訪ねてくださるようと神様に祈っています。皆さんが来てくださると、力と希望が湧いてくるからです。私は、加害者の家族といろいろなものを分かち合いながら、一緒に生きていきたいと願っています。リーチの活動には感謝の気持ちで一杯です。以前は何を着ようと気にしませんでした。でも今はきれ

いな服を着て、他の人々のところに自分から出かけていくようになりました。私は地獄をくぐり抜けました。でも人間に戻ることができました。」

### ■希望を担う名もなき人々

ジェサイド記念期間が始まってからの2週間、今から12年前に長期間フィールドワークをしたことのある二つの村に入り、人々からじっくりお話を聴かせていただきました。同じ村に住むジェノサイドの生存被害者、刑期を終えた加害者、加害者の家族、ツチの人々をかくまったフツの家族、そして、戦争で多くの家族を失った人々、そして、現政権側の兵士によって家族を殺された人々... この12年間で明らかになったこと、隠されたままのこと。12年を経て語るができるようになったこと、未だに語れない、あるいは語る事が許されていないこと。ルワンダを覆う闇は、まだとても深いとあらためて感じずにはおれません。しかし、聴き取りを続ける中で、その深い闇の中でも、確かに光が輝いていることを確認しました。そのいくつかをお分かちしたいと思います。

最初の一週間通い続けたG村で、ツチの子どもたちをかくまったフツの方々4人からお話を聴きました。そのうちのお一人、ツチの男性と結婚した姪っ子から頼まれ、6人のツチの子どもたちをかくまったAさん(85歳)の言葉が心に残りました。妻と協力して、度々捜索にくる村人たちから子どもを隠し通したというお話は、聴いている私が手に汗を握るような、緊迫感に満ちたものでした。Aさん夫婦は、毎朝子どもたちに食事を与えた後に、彼らを裏山の繁みに連れて行って隠すということを2か月半続けたのでした。

「命の危険を感じ、私は姪にその子たちをどこか別の場所に連れて行くように頼んだ。でも彼らが行けるところは無かった。そこで妻と二人で、この子どもたちが見つかって殺される時には、自分たちも一緒に死のうとって決意した」。こう静かに語る老人の言葉に圧倒されながら、私は、「どこからそのような勇気と力を得たのですか」と尋ねました。すると、



＜ルワンダ農村部の風景＞

「それは、神様が与えてくれた贈り物でした」と一言。自分を全く誇る事が出来ませんでした。

後半に訪ねたK村では、虐殺生存被害者組織イブカ(ルワンダ語で「記憶せよ!」)の代表を務めるLさん(33歳 男性)から、ガチャチャ裁判が行われていた当時のことや、その後の村の人々の様子について話を聴きました。Lさんは、K村の住民で唯一ジェノサイドによって殺害されたツチの女性の一番下のお子さんです。Lさんの父親はフツで、5人の妻を持ち、彼が幼少のころに母親と子どもたちのもとを去りました。

K村では、ツチと見なされた人々への襲撃は、1994年4月7日、前大統領搭乗機の撃墜事件の翌日に始まりました。Lさんは当時、彼の兄と一緒に首都キガリで身を隠して生き延びましたが、新政権が発足した7月に村に戻り、母親の殺害現場となった自分の生まれ育った家を訪れました。その時、その家の床にはまだ、黒々とした血糊が残っていました。母親はそこで、槍で突かれて殺されたのです。

彼はその時、いつか母親を殺した者たちに報復しようと心に誓いました。殺害に関与した者たちの多くは、国境を越えてザイール(現コンゴ民主共和国)に逃亡しましたが、後に帰国した者たちが逮捕され、ギセニという町にある刑務所に送られました。

彼が加害者数名と出会ったのは、母親の殺害から10年以上を経てのことでした。その村で開かれたガチャチャ裁判で、既に服役していた加害者8人が、彼の母親の殺害と財産の略奪を認め、彼と

彼の兄弟姉妹に謝罪しました。その後、それらの加害者は全て服役を終え、K村に戻り今に至っています。

Lさんは、2002年8月、彼の姉をかくまってくれたフツの家族の娘さんと結婚しました。今、その方と二人の子どもたちと一緒にK村で暮らしています。彼にはまだ存命の兄弟姉妹が4人いるのですが、そのうちの3人が、地元のフツの家族のお子さんたちと結婚し家庭を築いています。3人のうちの1人、姉のMさんは、加害者の男性と結婚しているということでした。

Lさんは、もはや加害者に「復讐つもりはない」、「彼らを赦した」と私の目を見てはっきりと言いました。そして、既に亡くなっている一人の姉、Cさんのことを話してくれたのでした。Cさんは、9人兄弟の上から3番目にあたる方で、今も存命であるならば51歳。敬虔なカトリック信徒の小学校教師として、K村の子どもたちや人々から慕われた女性でした。

ジェノサイドの終結後、その彼女が自分の兄弟姉妹に繰り返し語ったことがあります。それは、こういう言葉です。「憎しみを断ち切るために、あなたたちは地元の人たちと結婚しなさい。それがたとえ、加害者の家族だったとしても。そうすれば、いつかまたあのようなことがこの国で起きたとしても、私たちの村で殺戮が起きることはないから...」彼女は病に倒れた後も、天国に帰る直前まで、病床でそう兄弟姉妹を諭し続けたのでした。

今から20年前、肉親を殺されたばかりか、自分自身も狩りの獲物のように追い立てられた人々が、自分たちを殺す側に回った人々と同じ村で生きていく。「できることなら、加害者の顔など見ないで生きていきたい」というのが、多くの人々の正直な気持ちなのかもしれません。しかし、好むと好まざるとに関わらず、虐殺の当事者同士が、同じ村で暮らしていかなければならないという、厳しい現実の中で彼らは生きているのです。

しかし私は、その場所に留まって生きるということが、それ以外に選択肢がないので仕方がなくして

いるというような、消極的なものであるとは思いません。それはむしろ、厳しい現実を主体的に引き受け、敵を自分と同じ人間として受け入れ、その人々を赦し、その人々と共に生きるという闘いなのです。

母親を殺した人たちと共に生きていきなさい、その人たちと家族を築いていきなさいと言い残してこの世を去ったCさん。そして、彼女の遺言に従い、今、K村で生きているLさんたち兄弟姉妹。ルワンダの希望は、そのような名もなき人々が続ける日々の闘いによって支えられているのです。

### ■「ネバー・アゲイン」一虐殺犠牲者追悼式典

4月26・27日の2日間、ピアスの前身、プロテスタント神学校の関係者の追悼式典がありました。ピアスでも神学部教授とそこご家族、そして4人の神学生がジェノサイドで殺されたのです。遺族の方々もお招きし、犠牲になったお一人お一人の生涯に思いをはせ、その方々の地上での生が突如として奪われてしまったことを哀しむとともに、今生かされている私たち自身の責任について考えることを迫られる追悼式でした。

平和構築を専攻する学生が創設したピースクラブのメンバーたちが、練習を重ねて準備したパフォーマンスの中で、犠牲になったお一人お一人に花を捧げ、「NEVER AGAIN!」、「ジェノサイドを決して繰り返さないために、自分たちが働いていく!」と力強く訴えました。

ジェノサイドの生存被害者でもあるツチの学生たち、ジェノサイドの後、避難先のザイール(現コンゴ民主共和国)で親族を失ったフツの学生たち、バニャムレンゲと呼ばれるコンゴ東部で暮らしてきたルワンダ系の学生たち、そして、ブルンジとコンゴ民主共和国からの留学生たちが力を合わせたパフォーマンスに、私も胸が熱くなりました。彼らと関わっていると、まだ心の中に様々な傷を持ちながらも、自分たちが平和を築いていくのだという気概を感じるのです。この若者たちが、民族を超え、国境を超え、このアフリカ大湖地域の未来を切り開いていく



のです。

彼らがどんなことに関心を持ち、心を痛め、喜び、そして、どんな夢を語り合っているのか、彼らが立ち上げたフェイスブック(PIASS Peace Clubで検索可能)をご覧ください。どうか日本から彼らにメッセージをお送りください。



＜追悼式でパフォーマンスを行ったピースクラブ＞

#### ■終わりに

巻頭言でもお伝えしたように、ルワンダの人々の心と体には深い傷が、しかも、まだ癒されないまま残っています。それは、私の学生たちを含む次世代を担う若者たちも同様なのです。昨晚あった「和解の理論と実践」という授業の中でも一人の女学生が、「あの時まだ子どもだったけれど、私の家に民兵が押し入ってきて、ある男性の頭をナタで切り落とした光景をはっきりと覚えている。それ以来、私はナタを持っている人を見ると、どうしようもない嫌悪感を覚えてしまう」、と告白しました。ルワンダには、このような体験をした子どもたちが数えきれないほどいるのです。

自らの痛ましい体験や愛する者たちの死について語る事が実質的に許されていない人々がいることも、私たちは忘れてはなりません。私はこれまで10年以上、数えきれないくらいの人たちからお話を聴いてきました。その中には、ジェノサイドの生存被害者だけでなく、ジェノサイド以外で家族を失った人たちも数多く含まれています。

1994年7月、ルワンダ内戦の終結後、反政府武装勢力から政権与党に転じたルワンダ愛国戦

線が、1990年以降、ルワンダ国内やコンゴ民主共和国において、民間人の殺戮を含む深刻な人権侵害に関与したことは、複数の国際人権団体や国連等のレポートによって明らかにされています。

しかし、今のルワンダでこれら「ジェノサイド以外」の被害について語ることは非常に困難です。それは、「ジェノサイド以外によってもたらされた死」と人々が言う時、単に「戦争の犠牲者」ということに留まらず、ルワンダ愛国戦線による残虐行為の犠牲者の存在という、現政権にとって「不都合な真実」を想起させることになるからです。そこで、「ジェノサイド以外」に触れること自体がタブーとなるのです。

私は決して、一つの民全体を殲滅寸前にまで追い込んだあのジェノサイドと他の事柄とを同列に扱うつもりはありません。親族のほとんどを殺し尽くされ、「大学を卒業しても、私にはその喜びを分かち合う人が一人もいない」とある学生を言わしめた、ジェノサイドの酷さを心に刻まなければなりません。しかし、ジェノサイド以外によって大きな苦しみを受け、深い哀しみを持つ人々のことも忘れることはできません。もちろん、「ジェノサイドは、国際法で最も重大な犯罪として規定されている。だからその犠牲者を特別に追悼するのは当然だ」との議論があります。しかし、それを理由にジェノサイド以外の犠牲者の遺族が沈黙



＜ピアスでのジェノサイド犠牲者追悼①＞

を強いられることがあつてはなりません。失われた愛する者たちを哀悼するという、私たち人間にとっての根源的なニーズが否定されることがあつてはならないのです。

このようなことをお伝えしたのは、ルワンダの人々の癒しと和解の歩みが決して一筋縄ではいかないものであることを知っていただきたいからです。真の平和と和解がルワンダで実現するには、まだまだ長い年月が必要です。しかし、今号で紹介させていただいたような、同じ場所で共に生きていくことを決意し、日々「和解と共生」という名の闘いを続ける人々のもとに希望があります。そして、自らもまだ癒されていない傷を持ちながらも、「ネバー・アゲイン」、「平和を創るのは自分たちだ」という気概を持ち、共に行動を始めた若者たちに希望があります。彼らと共に、希望を紡ぐ活動を続けていきたい。心からそう思います。



＜ピアスでのジェノサイド犠牲者追悼②＞

ジェノサイド20周年の犠牲者追悼期間は7月まで続きます。癒しと和解の旅を続けるルワンダの人々が神様の慰めと励ましを感じ、主にある希望を確信することのできる恵みの日々になりますように、続けてお祈りください。

## 事務局からのお知らせ

● 佐々木和之さんの今年の帰国予定は、6月中旬と11月中旬の二回です。「支援する会」が主催または共催する帰国報告会は、次の通りです。11月10日には福岡で開催予定（詳細は後日）です。

### ◇ 帰国報告集会 in 高知

2014年6月14日(土)14:00-15:30 高知伊勢崎キリスト教会 高知市伊勢崎町3-8

### ◇ 帰国報告集会 in 神奈川

2014年6月22日(日)15:00-17:00 洋光台キリスト教会 横浜市磯子区栗木1-22-3

### ◇ 帰国報告集会 in 金沢

2014年6月25日(水)19:00-20:30 金沢キリスト教会 金沢市笠舞2-6-28

### ◇ 帰国報告集会 in 筑波

2014年6月29日(日)14:00- 筑波バプテスト教会 つくば市稲荷前23-2

● 「佐々木さんを支援する会」のフェイスブックが立ち上がりました。「ルワンダの平和と和解のために」(<https://www.facebook.com/rwandawakai>)。ぜひ、ご覧ください。

● 事務作業簡素化のため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありません、ご了承ください。● 郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会

● 佐々木さんを支援する会HP (ホームページ) <http://rwanda-wakai.net/>

● 世話人会 金子 敬(古賀教会牧師)、中條智子(三島教会牧師)、蛭川明男(洋光台教会牧師)、村上千代(日本バプテスト女性連合幹事)、播磨 聡(広島教会牧師)